

Special Essay

有田焼と有田陶器市

外科学講座

明石英俊

この数年、5月のゴールデンウィークには1日または1泊2日で有田の陶器市を見に行くようになった。特別に何かきっかけがあった訳ではない。医者になって5年目くらいからの約20年間、休みの多くはアルバイトの他の病院の勤務か、あるいは私の専門分野である血管外科分野では多いことですが、殆どが拘束であり、緊急手術に呼び出され、なかなかフリーの時間が持てない状況だったのが、この数年、後人も育ち、少々時間がもてるようになったことが、理由かもしれない。ほかの理由を捜すと、20年前にドイツに留学滞在していた際、宮殿、博物館、お城で多くの有田焼の磁器を目にしたのも小さな理由でしょう。さらに、大河ドラマや時代劇などを見るにつけ、特に戦国時代などでは必ず、陶器、磁器が何等かで関わってくるのも不思議でならなかったからかもしれない。元来、陶器と磁器の違いも知らなかった私ですので、大きなきっかけがあって陶器市に出向いた訳ではありません。ちなみに陶器は「土もの」磁器は「石もの」と言われるようです。磁器は磁石すなわち岩石のようなものを細かく砕いて粉にしたものに水分を加えて練って作成するもので、陶器は粘土を思い浮かべると良いでしょう。また磁器が全て白というわけでもないようです。同じ磁器でも九谷焼ではやや黒っぽい焼き上がりらしいです。雑談はこれくらいで本題に入るとしましょう。

陶器市に出向くようになってから有田焼や有田陶器市のことを少し調べてみるようになりました。そして、その歴史は豊臣秀吉に始まるようです。秀吉が天下統一して、その後に朝鮮出兵しました。すなわち、文禄・慶長の役(1592～1598)であります。この戦に出兵した鍋島直茂が朝鮮での道案内として捕らえていた陶工 李 参平を今の大韓民国から日本に連れ帰り、この陶工が有田の泉山で磁石鉱を発見して1616年に磁器を焼き始めたのが日本の磁器の始まりとのことです。それから約200年間この磁器の製法は陶工を隔離することによって秘密を守られ、有田の地にてのみ、代々受け継がれ作られたのです。この製法の秘密は江戸時代後期まで守られ、その後、全国に広まります。そして、この時期、日本では有田だけで作られていた磁器は1659年から東インド会社

を通じてヨーロッパに輸出される様になり、特に柿右衛門による赤色絵磁器はヨーロッパの王侯貴族に人気を博し、ドイツのマイセンでもこの有田焼を真似するほどであったようです。このようにしてヨーロッパに輸出された有田焼を、私たちは留学先のドイツやオーストリアで多数見ることになったのです。さて、私たちはよく古伊万里という言葉を目にしますが、この語源は有田焼が近くの伊万里港から積み出されたため、伊万里焼と呼ばれるようになったのです。現在では江戸時代に作られた有田焼が古伊万里と呼ばれているようです。

有田の陶器市はいつからどのようにして始まったのでしょうか。歴史をさかのぼると、明治29年に開かれた陶磁器品評会がその始まりのようです。そして、その品評会と同時に深川製磁の深川六助が呼びかけて、大正4年から開催された「蔵ざらえ大売出し」が陶器市になったのです。そして、大正11年から名称が陶器市となり、現在の有田陶器市まで繋がります。品評会は今は九州山口陶磁器展と言う名前で存続しています。このような有田の昔からの催し物には香蘭社、深川製磁などが深く関わっていたようです。当時は傷物、半端物をやすくで売りさばっていたようですが、いまでは、芸術品から日用品まで傷物もそうでないものも、ありとあらゆるものが売りに出されています。また売り場も、有田駅近辺の約4kmほどの通りのほかに有田卸団地でも販売されており、人出は一週間で100万人を越え、1日では多くは見回れないほどになっています。

私は長崎生まれで、今は久留米に住まい、有田とは常に比較的近くに居たわけですが、最近まであまり興味もなく、知識もなく、暮らしてきました。しかし、少し調べたりすることで、買い物にも意味を感じたりします。100万円の柿右衛門の壺を買うことはないでしょうが、ちょっと洒落たコーヒーカップか、お湯のみは買うこともあるでしょう。汗をかいて少し疲れるのも心地よいこともあるでしょう。

